

M. デューイの大学拡張構想

小池源吾

(2000年9月30日受理)

The Design of University Extension by Melvil Dewey

Gengo Koike

In the latter half of 1880s, early efforts were made to plant English university extension on the land of the United States of America. People who had the foresight explored the possibilities of American popular education, and found out new horizons in university extension.

Melvil Dewey, who had been known as “a designer of decimal classification”, was among those persons. He invited Herbert B. Adams to the annual conference of American Library Association (1887) to deliver a lecture on university extension. More important it may be that university extension work was launched in the State of New York under the direction of Dewey, then the secretary of the Regents of the University of the State of New York.

This article aims at (1) inquiring into the ideas of university extension in the mind of Dewey, and (2) considering the university extension scheme in the University of the State of New York.

In consequence, findings are as follows:

- (1) Dewey acknowledged the most important part of popular education was home reading.
- (2) He endeavored to link encouraging home reading to providing extension lectures.
- (3) He conceived university extension “in the broadest conception of education”.
- (4) In the University of the State of New York, therefore, the department of university extension was composed of 4 divisions; Public Libraries, Study Clubs, Extension Teaching, and Summer Schools. Which should be considered as the Americanization of English university extension.

Key Words: University Extension, Melvil Dewey

キーワード：大学拡張、メルヴィル・デューイ

はじめに

アメリカの教育史を通覧してデューイと言え、およそ二人の人物を思い浮かべる。ひとり進歩主義の教育哲学者ジョン・デューイ (1859-1952) であり、他のひとり、本稿で取り上げようとしているメルヴィル・デューイ (1851-1931) である。

メルヴィル・デューイは、1851年12月10日、ニューヨーク州の一村アダムズ・センターで雑貨屋を営む父ジョエルと母エリザの末っ子として誕生している。彼は、日記のなかで、図書館にはこども時代から関心を寄せていたと述懐しているが、⁽¹⁾ 一生を図書館に捧げることを選択したのは、アマースト大学に入学してからのことであった。学生補助員として大学図書館で働く彼にとって最大の懸案は、眼前の書籍をいかにすれ

ば単純な方法で体系化することができるかであった。こうして考案されたのが、「十進分類法 (Decimal Classification)」である。今日みるような図書館の蔵書管理のあり方は、弱冠21歳の若者の着想に大きく負っているのである。

以来、彼は、図書館界における輝かしい経歴で彩られることになる。『ライブラリー・ジャーナル』の創刊、アメリカ図書館協会の結成と運営、1883年にはコロニア大学図書館長に就任するとともに図書館学部の創設に尽力する。1889年1月、ニューヨーク州立大学機構⁽²⁾に転職した後も理事会の事務局長、ならびに州立図書館長として辣腕をふるっている。図書館史に記したその功績を讃えて、デューイは「近代図書館の父」と呼ばれることもある。⁽³⁾

それゆえ、メルヴィル・デューイといえ、ふつう

図書館学または図書館史の中で扱われてきた。したがって、ニューヨーク州立大学の事務局長時代が取りあげられた時にも、図書館行政や図書館学校への貢献は論じられても、その彼が、大学拡張になみなみならぬ関心と努力を傾注していたという事実は等閑に付されてきた。もっとも、大学拡張に関する記述が皆無というわけではない。まれには大学拡張に言及されることもある。⁽⁴⁾しかしその場合にも、大学拡張は、傑出した図書館人の個人史を構成する一側面として取り上げられているにすぎない。したがって本稿では、デューイをアメリカ合衆国における初期大学拡張史の文脈のなかに位置づけて、彼の企図、および実践を考察することを目的としている。その際、すでに図書館界の指導者たることを自他ともに認めていたデューイであってみれば、なぜにイギリスの新奇な実践に関心を寄せるにいたったのかは大いに興味をそそられる問題である。しかも彼は、思索家と言うより、卓越せる実践家であった。1889年にはニューヨーク州立大学の理事会を前に、大学拡張の実施を提案している。その後、同州が推進した一連の大学拡張事業が彼の指導下で展開されたことは言うまでもない。ここから、1890年代ニューヨークで試行された大学拡張の何たるかを考察することは、デューイがいかなる目的と方法をもって大学拡張の推進にあたらうとしていたかを把握することにも通じるはずである。

デューイの大学拡張提案

デューイは、『The Critic』(1891年8月号)の誌上で、「5年前、否、3年前でさえ、『大学拡張』と聞いても、ほとんどのアメリカ人には何のことやらわからなかった。」と述べている。⁽⁵⁾そこでは、大学拡張がいかに迅速にアメリカ人を魅了し、普及をみたかということが言外に語られている。しかし、かく言うデューイは、大学拡張という呼称でもって創始された新奇なスキームがイギリスに存在することを、いつ、いかなる方法で知り得たのであろうか。ちなみに十九世紀の第4・四半期に全国的な規模に発展した成人教育運動にシャトーカがある。そのシャトーカの創始者ヴィンセント(Vincent, John H.)は、1886年の訪英の折見聞した大学拡張にいたく感動して、帰国後ただちに実施要領の作成に着手している。デューイがこのシャトーカに関わっていた事実を考えあわせると、ヴィンセントを通じてイギリスの先例にふれた公算は高い。一方、デューイ自身、1877年にアメリカ図書館界の代表のひとりとしてイギリスに赴いている事実も看過するわけにはいかない。スチュアート(Stuart, James)の提案

を受けて、ケンブリッジ大学が拡張事業に着手したのが1873年であるから、デューイは、その実践を目の当たりにする機会に恵まれたかもしれないからである。だが、いずれがデューイをイギリス大学拡張に引き合わせる契機になったかについては、いまのところ十分に検証するにはいたっていない。

とまれ、すくなくとも1887年の時点において、彼はイギリス大学拡張にかなりの程度精通していた。そのように考える理由は、概ね以下のようなものである。同年9月6日から9日にかけて、アメリカ図書館協会が開催した年次大会において、ジョンズ・ホプキンス大学の歴史学教授アダムス(Adams, Herbert B.)は、「Seminary Libraries and University Extension」と題する基調講演を行っている。⁽⁶⁾ここで詳細を述べることは割愛せざるをえないが、その講演は、「セミナリー図書館(seminary libraries)」、「図書館の活動(The Work of Libraries)」、「イギリスの大学拡張(University Extension in England)」の3部から構成されている。この講演こそ、アメリカでイギリス大学拡張を公的な場で紹介した端緒とみなされている。

当時、有力な大学は、ドイツに範を求め、研究機能の整備に腐心していた。「セミナリー図書館」は、そうした動向を念頭に置いて、ゼミナールでの教育に供する図書館のあり方を論じたものである。これに対して、第2部では、民衆のための教育実践を展開すべく、図書館は“民衆大学”たれ、と論じている。そのなかで連続講義コースの実施を提案したという意味において、第3部と接点をもつと言えなくもない。だが、1回分の講演として冷静に検討したなら、それら三種の内容は、相互の関連性に乏しく、奇異な感じは否めない。しいて言えば、図書館と大学拡張を併置して論じたところに特徴があるかもしれない。しかし、もともと図書館と大学拡張を民衆の教育という目的のもとにリンクさせようとしたのは、デューイの企図そのものではなかったか。アメリカ図書館協会発足の真の立て役者にして、しかも基調講演にアダムスを指名する役を買って出たのも、じつは同協会の会長デューイであった。それゆえに、アダムスの講演内容は、デューイの意向をすくなくならず反映したものになった。このように考えると、アダムスの講演にみる構成の不自然さも、納得がいくのである。⁽⁷⁾

ところで、アダムスの基調講演に大いに触発された人物に、図書館のあり方を模索する気鋭の司書たちがいた。そうした人びとのうち、たとえばバアツファロー公共図書館の司書ラーニド(Learned, William S.)をはじめ、シカゴ公共図書館のプール(Poole, William F.)らは、帰郷すると直ちに図書館を拠点にした大学

拡張事業に着手している。こうした事態の展開を目の当たりにして、デューイは、まさにわが意を得たりと感じたにちがいない。

だが本稿の主題にひきつけていえば、それ以上に重要な転機が、コロンビア大学から解雇された翌年の1889年におとずれることになる。⁽⁸⁾一連の事態は、ニューヨーク州立大学の理事のひとり、リード(Reid, Whitelaw)から、州立図書館の移転と再編について諮問されたことに端を発し、1889年1月、州立大学の事務局長への就任でもって決着をみている。ここにいうニューヨーク州立大学については、若干の説明をしなくてはならないだろう。デューイは、ニューヨーク州について「高等教育だけを所管する部署を有する唯一の州である。」と述べ、「the University of the State of New York」(傍点筆者)と言っても、「それは、教育機関ではないし、教授や、教室、そして一般的な意味においての学生も擁してはいない。」⁽⁹⁾と、その特異性を指摘している。また同じ論文の別の箇所では、次のように解説している。

「A. ハミルトンが考えていた連邦政府の構想が、ニューヨーク州立大学(the University of the State of New York)に強く反映された。現実には、それは、州内のアカデミー、カレッジ、ユニヴァーシティ、専門大学、その他の高等教育機関の連合(federation)を含意している。……(したがって)ニューヨーク州立大学は、州会議事堂のなかに専用の40ないし50の部屋をもっているにすぎない。」⁽¹⁰⁾

ここに示されているように、“university”と言うタームは用いられているが、一般にいわれるところの「大学」を連想すると誤りをおかすことになる。むしろ州内の高等教育機関を包摂した中央集権的な管理運営機構と考えた方が実体に近いだろう。その中枢にポジションを得たのであるから、デューイにとってみれば、かねてより抱いてきたアイデアを具現化する千載一遇の機会を得たことになる。

それは、1889年1月10日であるから、事務局長に就任してまだ10日しか経っていない。その夜、デューイは理事会の面々を前に、「The Extension of the University of the State of New York」と題して講演を行なっている。『州議会議事録』に収録された、同夜の講演内容はタイプ原稿にして42ページに達する。この分量に加え、途中30分間、幻灯を使用してイギリス大学拡張の紹介があったと付記されているから、長時間にわたる彼の熱弁ぶりが髣髴とされる。ただし、なにぶん演説原稿であるから、強調せんがために意識的に内容を繰り返した箇所や、論理の飛躍などもあって、かならずしも理路整然としているわけではない。そこ

で、この時期に発表した論稿も参酌しながら、大学拡張に関するデューイの言説をまとめるなら、およそ次のようになる。

大学拡張について、彼は、伝道師の利他的な精神に由来する営為とみなしている。⁽¹¹⁾すなわち、感化し、向上へと導く影響を民衆に拡張しようとしても、なりゆきまかせにカレッジを創ったのでは、砂漠の中にある泉のように、恩恵に浴するひとびとはかぎられてしまう。そうした好ましい影響は、水が海を覆うがごとく、あますところなく村々に及ばねばならない。そのために、「民衆と大学とを結びつけ」、⁽¹²⁾具体的には、大学の構内に寄宿することができないひとびとのところに大学を運ぶ事業が大学拡張である、と言う。⁽¹³⁾

だからこそ、やがてブームがおとずれた時、受けをねらっただけで、そのため読書や学習、講義、試験等が出鱈目であったり、とんでもないもの、あるいはどうでもよいものが、まともなもの峻別されぬまま、それらすべてが「大学拡張」と呼ばれるような状況は⁽¹⁴⁾容認しがたいものがあつたにちがいない。そうした心情が、以下に引用した文章に吐露されている。

「大学拡張は、教育の分野ではすでに揺るがぬ社会的勢力となっている。しかし、関係者と民衆の双方が、拡張事業とは何か、それを効果的に実施するにはどうすればよいかを理解するようになるまで、大学拡張は、誤解の時期を経験し、おそらく反対者たちよりも支持者たちに悩まされる運命にある。まさにいま、それは、流行の真只中にあり、20年前一大ブームを博した自転車とか、最近では、小さな村でさえその新しい娯楽のためにクラブをつくるほど人々を熱狂させたローラースケートと同様に、全国に広まりつつある。不幸なことに、あらゆる物事は、大学拡張に似て、多かれ少なかれその名称だけで呼ばれる。流行とか名前に飛びつき、それに迎合しようとする多くの人びとがいる。自分では提供する機能を持つことができない講義コースについて、ひとりの者がほこりを払いのけ、“大学拡張”と大見出しを掲げると、それはすぐさま注目を集める。……それは、新しい名称の乱用にほかならず、運動のまさに最前線で民衆の嗜好に迎合しようとする努力にほかならない。」⁽¹⁵⁾

大学拡張は、「大学の精神(spirit)と方法、および理念を運ぶことに意味がある」⁽¹⁶⁾のであるから、大学が主体的に関与することは大前提であったし、⁽¹⁷⁾同時に、その意図に適った方法や形態を具有することが必要不可欠とみなされた。⁽¹⁸⁾そのうち前者についていえば、ニューヨーク州立大学の独特な役割を看過するわけにはいかないだろう。実際、そうした特徴に

ついて、彼は後に次のように述懐している。「もしも大学拡張が、既存の機関が有する施設を十分に利用しなかったり、それらと密接に関係しなかったなら、永続的な成功をおさめることはけっしてできなかったであろう。仮に、それぞれのカレッジやユニヴァーシティが大学拡張を管理運営する組織を自前で維持することになっていたなら、その費用は嵩んだであろう。」⁽¹⁹⁾と。すなわち、すでに州内の各地に373のカレッジおよびアカデミーが存在していたし、それらを統括する州大学機構が成立をみていた。デューイは、この「cooperative system」⁽²⁰⁾を基盤にして大学拡張の運営を考えた。つまり州内の高等教育機関を傘下におさめたニューヨーク州立大学がうまく機能しさえすれば、州内くまなく拡張事業を届けることが効果的に実現できる。ニューヨーク州は大学拡張を創始する上で、じつに有利な条件を備えていると、デューイが理事を説得し、繰り返し強調したのは、こうした理由による。

他方、大学の精神と方法を民衆のところにもたらす方法に関しては、イギリス大学拡張の18年間の実績に敬意を払っていたことがわかる。彼の言うところにしたがえば、教育とは、明快にして継続的な思考の訓練 (training in clear and continuous thinking) をさす。それが、たった1回の講義を聴いただけで成就できると考えるのは、ギムナジウムで1時間体を動かしただけで、みごとに体を期待するのにひとしいと述べて、単発の通俗講演を批判するのである。⁽²¹⁾その点では、連続講義、クラス、課題論文、試験、修了証書から構成される「大学拡張講義コースのユニット」は、周到的な配慮のもとに考案された教育の方法にちがいがなかった。

だからといって、デューイはイギリス大学拡張の方式を頑なに信奉するような人間ではなかった。それが証拠に、彼は、随所で読書の意義にふれては、図書館の重要性を強調している。たとえば、以下のようである。

「多くの者が看過しているように思えるひとつの事実を強調したい。公共図書館は、大学拡張にとって基石とみなされる。大学拡張講師の使命は、教育 (instruct) というより、鼓舞、激励する (inspire) ことにある。彼は、自ら推薦した本や論文を受講生たちが読み、その大いなる成果を携えて翌週のクラスに出席してくるよう、教科への関心を高めなくてはならない。」⁽²²⁾

「図書館は、今日、真の民衆大学 (people's university) である。しかし、もしも民衆が、書物から最良のものを得ることができるよう指導し、興味を喚起し、そして援助してくれる教師と個人的

に接してみようという気にならなければ、図書館は、その役割を完遂することはできない。われわれに必要なのは、大学から、インスピレーションにとむ拡張講師が頻繁にやってくる拡張クラスのための教室を備えた、極上の図書館をすべての町がもつことである。そのように大学と強く結びついた図書館は、丘の頂上にある貯水池と連結した給水栓にたとえられるだろう。」⁽²³⁾

ここから、図書館と一般に呼ばれる施設は、その1階をギリシャ十字架の形に建設し、参考図書室と閲覧室、貸し出し図書室、科学博物館、歴史・芸術博物館の4機能を担うべきこと、そして2階に、大学拡張のための教室を配置すべきことを提唱するのである。⁽²⁴⁾

このようにみえてくると、デューイは、家庭における読書を民衆教育の基層に位置づけた上で、読書と拡張講義とを相補的な関係においてとらえていたことが判る。図書館人としての信条からすれば、彼が読書の教育的意義を看破し、図書館の役割を重視したのは当然といえるかもしれない。だが同時に、この時期、「州立図書館と州立博物館は、州立大学 (University) の統合された一部」⁽²⁵⁾になっていたという事実も重要である。換言すれば、オックスブリッジを拡張しようとする意図がいわゆるイギリス大学拡張を成立せしめたと同じように、デューイは、ひたすらニューヨーク州立大学を拡張することを企図していたのである。まさにその点で、ニューヨーク州の試みは、イギリス大学拡張の様式をそのまま踏襲することに腐心していた他地域の実践とは趣を異にしていたといえるだろう。

ニューヨーク州における大学拡張の法制と機構

デューイの書き残したものを通覧すると、彼は、随所で大学拡張のあり方について論じている。1889年の講演にしても、そうである。かいつまんでいえば、およそ次のようになる。もしも現在使用している生活用水に衛生上問題があったなら、早急に対策が講じられねばならない。その場合、山間には清浄な水を無尽蔵にたたえた川は流れているのだが、それは、何マイルも離れた場所であったとしたらどうだろう。ひとびとには、そこまで水を汲みに行けと言うだろうか。しかし、水を汲みにその山まで出かける時間と費用を合わせた人間は、百人のうちひとりしかいないということが判明したなら、どうするだろうか。いろいろ試してみた挙げ句、水路や管でもって水を引いてくるという手を考え出すはずである。つまり、ひとびとが山に行けないとあらば、山をひとびとのところに持ってこようというわけである。ここでいうところの

「山」を大学に、そして「水」を知識や文化と読み替えてみると、この喩えに象徴された大学拡張の根本原理が理解できる。⁽²⁶⁾

だが、1889年初頭の演説で、デューイは、大学拡張について一般論を語ったわけではない。明らかに彼の真意は、理事会に大学拡張の意義を理解させ、ニューヨーク州においてその実施を促すことにあった。新旧の大学観を対比させ、かつては少数者のためにあった大学は、いまや多数者のために存在することが要請されていると指摘したのも、また同州の教育行政および高等教育の機構そのものが大学拡張にいかにか都合な条件を備えているか強調し、そしていざ拡張事業が実施された場合、州民はもとより高等教育機関にもたらされるであろう利点にまで言及したのも、すべてそのためである。

理事会の素早い対応をみると、デューイの意図は十分達成されたと言えるだろう。⁽²⁷⁾すなわち同夜のうちに理事会は、大学拡張に関して当面の基本方針を取りまとめ、7月10日の理事会総会に上程している。⁽²⁸⁾資料によると、理事会は、「大学で正規のコースを受講することができないひとびとに対する、大学の科目と文化 (university learning and culture) の拡張を、重要な事業と認識」するとともに、大学拡張に関する三人委員会の設置を決議していたことがわかる。三人委員会については、「大学拡張コースが開講されている期間中に、必要な図書をはじめ標本、実験装置、図版を各地に貸し出すための方策を含む、拡張事業を推進するための可能で有効な計画案を作成して、理事会総会に提出すること」と付記されているから、同委員会は、大学拡張の原案を策定する上で中心的な役割を担われていたと考えてよい。いずれにしても、大学拡張の重要性を認める見解が大学当局から公式に表明された意義は大きい。これを機に、大学拡張実施に向けていよいよ事態は動きはじめる。その後、理事会は、理事のひとりセクストン (Sexton, Pliny T.) を委員長に、常設の委員会として大学拡張委員会を設置している。⁽²⁹⁾

そうした一連の動向と並行して、特筆すべきは、1891年5月1日州知事ヒル (Hill, David B.) の署名でもって大学拡張法が成立をみたことである。⁽³⁰⁾同法は、大学拡張にはじめて法的な根拠を与えたという点で、歴史的な意味は大きい。教育機会を広くひとびとに拡張することを促進するための法律」(An act to promote wider extension to the people of opportunities for education) と別称される同法は、以下に引用したように3つの条文からなっている。

1. 教育の機会と便宜を整え、促進し、それを広

く拡張して、青年のみならず成人の手が届く範囲に届けるために、ニューヨーク州立大学には、そうした教育を希望する州内の地域や各種団体と協力し、それらに対しては、望ましい方法を勧めたり、適切な人物を講師に指名し、試験を実施し、その成績に基づいて修了証書を交付するなどの方法によって、援助を提供する権能が与えられる。

2. この法で定めるところのことを効果的に遂行するには費用が必要なこと、しかもそれは他の方法では確保できないことが、会計査察官および大学理事会によって承認された場合、総額1万ドル、必要とあらばそれ以上の額が公費から支出される。ただし、そうして支出された額のうちのいかなるものも、講師 (lecturers) とか専任講師 (instructors) に指名または任命された人物への謝金や所用経費に充当してはならない。その種の費用は、恩恵に浴する当該地域が負担するというのが、この法律の意図するところである。

3. この法律は、ただちに施行される。

この法律によって、大学拡張に対する公費支出の先鞭がつけられることになる。デューイは、公費支出の論拠を公益事業に見いだしていた。1889年の講演を例にとれば、彼は、知識や文化を飲み水にたとえ、無料で提供されるのが望ましいと論じている。だが、同時に、維持費をどう捻出するかという問題も無視できない。上水道の場合、水道管が破損すれば修理が必要となる。また水源池の維持管理はもとより、水の安定的な供給を図ろうとすれば、それなりの設備投資も欠かせない。したがって本来なら、それは無料で提供されるべきなのだが、維持費を確保しようとするれば、ある程度の負担は仕方がない。手ごろな料金ならば利用者に請求したとしても、それほど負担にはならないだろうと論じている。⁽³¹⁾そのため、1万ドルの使途は、事業の普及を目的に実施される模擬コースおよび巡回文庫、そして中央機構の運営に限定する一方、拡張事業そのものは受益者負担の原則が打ち出されている。⁽³²⁾

先述したように、清澄な飲料水を求めて山まで出かけることが困難ならば、逆に山から水を引こうという試みが大学拡張であった。とすれば、山から引いた水をひとびとの戸口まで届ける「水路ないし管」が、大学拡張機構にあたる。

大学拡張の機構づくりの過程でもうひとつ注目すべきは、ニューヨーク州立大学当局が、州内の大学関係者の理解と協力をとりつけるための努力を惜しまなかったことである。すなわち1890年7月10日の総会において大学拡張が組上へのほぜられた時点で、すでに大学代表者会議 (committee of representatives of the

colleges and universities of the state) を設けることが検討に付されている。その結果組織された同会議の顔ぶれをみると、コーネル大学のアダムス (Adams, Charles K.)、コロンビア大学のロウ (Low, Seth)、ロチェスター大学のヒル (Hill, David J.)、ユニオン大学のウェブスター (Webster, Harrison E.)、ヴァサ大学のテイラー (Taylor, James M.) といった、州内のいわゆる主要大学の学長が名前を連ねている。

この会議は、大学拡張に関する見解を4点にまとめ、1891年2月9日付けの書面にて理事会に提出している。⁽³³⁾ それによれば、大学に寄宿せずして大学教育の価値を本当に理解することはなかなか難しいであろうが、と前置きしつつ、(1) 大学教育を希望しながらも、長期にわたって大学で学ぶことができないひとびとに、大学の教育および文化 (university training and culture) を拡張することができれば、大いなる成果がもたらされると、大学拡張を積極的に支持する意向を表明する。続いて、(2) 州内の高等教育への関心は高揚し、彼らの希求するところを付度するに、いまや理事会が大学拡張システムを構築し、管理運営すべき時が到来した、と言う。ただし、(3) 大学拡張の本質的な特徴は、大学水準の教育を提供することにある、のだから、そのためには、(4) 拡張教育および試験については、理事会が、州内の大学の代表を通じて、その水準を一定以上に維持すべく努力する必要がある、と提言している。

一読して、報告書は、デューイの持論⁽³⁴⁾と符節を合わせたかのごとき内容となっている。州会議事堂に居を構える理事会が本部として機能し、州内の高等教育機関を傘下に置いて強力なリーダーシップを発揮することで、大学拡張を推進しかつその質の維持を図ろうというのは、もともとデューイが主張し続けてきたことであった。しかも興味深いことに、報告書の冒頭に、事務局長、つまりデューイからいくつかの事項について諮問があり、代表者会議で審議したこと、そしてその結果の詳細については後日事務局長を通じて理事会に報告される、との記述がみられる。とすれば、デューイは、州内大学関係者と密にかかわり、彼らの意思形成にもすくなからぬ影響を与えたことは間違いない。

ところで、1890年初期の大学拡張をめぐる状況は、いくつかの矛盾を胚胎していた。中産階級の知的欲求の高まりと「大学」拡張という名辞が醸す魅惑的な響きとが相まって、運動は、東部から中西部および南部にかけて燎原の火のごとく広がりを見せていった。ひとびとが大学拡張に熱狂する様は、デューイの目には、一世代前に流行した自転車や、この時期ブームとなっ

ていたローラースケートとさしてかわらぬもと映っていたことは、先述したとおりである。⁽³⁵⁾ だが、海のものとも山のものともわからぬ大学拡張であってみれば、多くの大学人は懐疑的な態度を露わにするか、さもなくば無視をきめこんだ。なかには自分たちの既得権益が脅かされることを心配する者もいた。したがって、大学拡張事業は、大学以外の機関や、拡張協会に代表される任意団体によって、大学の後ろ盾を持たぬまま、実施されるのが常態であった。

しかし、デューイは、大学関係者の理解と協力が大学拡張を成功裏に運営するための要諦であることを看破していた。大学拡張の機構のなかに、大学拡張協議会 (University Extension council) を設けた理由も、そこにある。主要な大学学長たちが大学拡張機構に正式に参画しているかぎり、たとえ大学拡張に批判の眼差しを向ける大学人がいても、彼らを懐柔することができようし、なによりも拡張講師の確保および拡張教育の水準維持が約束されるはずである。⁽³⁶⁾

大学拡張部 (the Department of University Extension) の組織化は、デューイが2度目の訪英から帰国するのを待って、1891年の11月から着手された。デューイ自身、1889年の初頭に、目指すべきところは明白なので、可及的早急に取り掛かりたいと公言しているものの、⁽³⁷⁾ 機関誌『University Extension Bulletin』の創刊号 (1891年) はもとより、翌年に刊行された第2号 (1892年) を通読しても、ニューヨーク州立大学が企図していた大学拡張事業の全体像は杳としてわからない。それが見えはじめるのは、手元の資料でいうと1894年あたりであろうか。たとえば『大学拡張部発行の年次報告書第2号』(1894年) では、その目次から、大学拡張部が4つの下部組織、すなわち公共図書館 (public libraries)、拡張教育 (extension teaching)、夏期学校 (summer schools)、学習クラブ (study clubs) の4課 (divisions) でもって構成されていたことがわかる。⁽³⁸⁾

ニューヨーク州立大学における大学拡張の特質を究明しようとすれば、それぞれの部署の事業内容を仔細に考察するのが本然とみなされる。しかし、紙幅にはかぎりがある。そのため、せめてここでは、上記4課のうちの拡張教育課が、イギリスに淵源を有する大学拡張、つまり「拡張講義コースのユニット」に基づく事業を所管したという事実だけは強調しておきたい。

折しもこの時期に、英米の大学拡張に関する比較研究を行ない、ハイデルベルク大学から博士号を授与されたひとりのニューヨーカーがいる。次に示す表は、その論文から引用したものである。⁽³⁹⁾ オックスブリッジ、ロンドン、ピクトリアなどイギリスの事例、そしてフィラデルフィアやシカゴとニューヨークを並

記した時、それぞれの数値が含意するものは共通していなければ、比較は成立しない。したがってラッセル (Russell, James E.) は、ニューヨーク州立大学の大学拡張部が行なう諸種の事業を視野にいれていたかもしれないが、抽出した統計は、まぎれもなく拡張教育課が所掌する事業だけであった。すなわち残る3課の事業実績を、この表からうかがい知ることはできないのである。換言すれば、それは、ニューヨーク州立大学のもとで着手された大学拡張が、オリジナルな様式から大きく逸脱した、まことに個性的なスキームであったことを意味する。

て論じはしたが、もとより大学拡張事業に関わろうとか、いわんや大学拡張にみずからを捧げようなどという意志をもっていたわけではない。

そうであればこそ、デューイの創意と、それを実践に結びつけたニューヨーク州立大学は、アメリカ大学拡張史に新局面を切り拓いた。これが、指摘すべき第一点である。

かつてはバンを求めていた民衆が、今では教育を求めるようになったと述べ⁽⁴⁰⁾、デューイは、民衆が教育に目覚めつつあることを敏感に察知していた。もうひとつ時代の要請として、彼が観ていたものは、新し

表 英米における大学拡張の比較

	短期コース	10講義以上のコース	コース数合計	受講生数	課題論文提出数	最終試験合格者数
オックスフォード	151	87	238	23,051	2,714	1,295
ケンブリッジ	78	155	233	15,824	2,565	1,730
ロンドン	16	120	139	13,374	1,958	1,231
ヴィクトリア			59	4,900	472	
フィラデルフィア	107	1	108	18,822	429	388
シカゴ	122	0	122	24,822	725	486
ニューヨーク	0	34	34	3,667	223	142

出典：Russell, James, E., *Extension of University Teaching in England and America: A Study in Practical Pedagogics*, p.221

おわりに

1890年には、フィラデルフィアで大学拡張協会が結成された。全国各地からの要望に応えるかたちで、早くもその半年後には、同協会は、大学拡張に関する全国大会を開催している。3日間にわたる大会では大学拡張の実践報告とそれをめぐって質疑が交わされた。よりよい実践を模索する人びとの熱気は会場に横溢していたといわれる。

だが、この運動の指導的役割を担ったアメリカ大学拡張協会がそうであったように、各地の実践のほとんどは、大学外で組織された任意団体を母体に展開された。仮に、大学拡張の推進に積極的な大学人がいたとしても、それは、あくまで当人の個人的な営為であった。大学が主体的に大学拡張と係わるには、いましばらく時間の経過が必要であった。実際、アメリカ大学拡張協会の創始者で、初代会長をつとめたペパー (Pepper, Willim) にしろ、二代目の会長ジェイムズ (James, Edmund J.) にしろ、前者はペンシルバニア大学の総長、後者は同大学で経済学を担当する若き学徒であったが、すくなくとも90年代初期に、大学を大学拡張の実施主体とみなしたという痕跡はみとめられない。また、アダムスやラッセルは、大学拡張につい

い大学のあり方であった。大学を基盤において大学拡張が構想された思想的背景は、ここにある。大学拡張に関する立法、および公的補助金の交付は、そうした思想の必然的帰結にすぎない。

第二点としては、大学拡張の特質にふれておかねばならない。事務局長デューイがかねてより重視していたのは、民衆教育としての家庭での読書であった。したがって彼がニューヨーク州で意図したものは、生活の中での読書を推進し、質を高めるための支援であった。図書館活動、とりわけ巡回文庫に情熱を注いだのは、そのためである。⁽⁴²⁾「大学拡張は、ひとびとの精神を鼓舞するのが大学拡張の役目、したがって拡張講義だけではみるべき成果はない。ひとえに家庭での読書にかかっている。」⁽⁴²⁾とか、「大学拡張においては、図書館こそが最も重要。」⁽⁴³⁾といった文言が、そのことを証左している。

とはいえ、これでは、「拡張講義コースのユニット」にもとづく実践を大学拡張と呼ぶ通念との間で大きな懸隔が生じることになる。しかし考えてみれば、もともと州立の図書館も博物館も包摂する高等教育管理運営機構を「ニューヨーク州立大学」と呼んでいるのであるから、「ニューヨーク州立大学の拡張」と言うかぎり、たとえ一般に用いられる意味での「大学拡張」

の概念とは齟齬をきたしたとしても、論理的にみるかぎりなら誤謬をおかしているわけではない。詐称したわけでもない。彼が、1889年1月、理事たちに初めて提言を行ったときに、その演題を「ニューヨーク州立大学の拡張」としていたのも、1891年に成立した法律が、「大学拡張法」と命名されている、サブタイトルには「大学拡張」ではなく、「教育機会の拡張」と抑制した表現を用いているのも、あるいはまた、目指すものは「大学拡張として考えうる最広義の事業」⁽⁴⁴⁾とデューイが明言したのも、ニューヨーク州で企図したものはイギリス的な大学拡張ではないということをやさやかに表明しようとする気持ちの表れと解することができる。

そして最後に、大学拡張部の管理下で創始された事業の展開を世紀転換期まで追ってみると、興味深い。図書館および学習クラブの事業は堅調な伸びを示し、また夏期学校にいたっては、デューイをして、今後私学の参入を確信させたほどの盛況を博している。それにひきかえ、拡張教育課が所掌する事業だけは衰微の傾向が顕著である。⁽⁴⁵⁾

とすれば、ここニューヨーク州において、イギリスから紹介された大学拡張は、構想段階と事業の展開過程の二度にわたってアメリカ化を余儀なくされたことになる。他方、夏期学校のアイデアは、周知のごとくシャトーカに負うところ大である。さらに学習クラブに対する巡回文庫の提供の仕方を見ると、まさしくそれは、シャトーカ文理サークル (Chautauqua Literary and Scientific Circle) で開発され、普及をみた通信教育の方法そのものであった。このようにみえてくると、ニューヨーク州立大学拡張は、イギリスから継承した理念とアメリカ成人教育との結節点に出現をみたことがわかる。それは、やがて世紀が改まるとき、アメリカ的な大学拡張が成立することを予感させるプロローグにほかならなかった。⁽⁴⁶⁾

注

(1) Dewey Diaries, Melvil Dewey Papers, in Lee, Michael Min-song, *Melvil Dewey (1851-1931): His Contributions and Reforms* (A Dissertation submitted to the Faculty of the Graduate School of Loyola University of Chicago in Partial Fulfillment of the Requirements for the Degree of Doctor of Philosophy), January, 1979.

(2) 原語は、the University of the State of New York である。しかし、本文中で後述するように、この場合の「university」は、通常言われるところの「大学」

の概念とはいちじるしく異なって、自前の教授団も学生もたない。むしろ州内に所在する複数のカレッジおよびアカデミー等、高等教育(中等教育機関を含む)を包摂し、それらを管理運営する中央集権的な行政機構を意味している。そのため、「ニューヨーク州立大学機構」と約出した例もみられる。しかし、本校では、「大学拡張」の用語法上、ひとまず「ニューヨーク州立大学」の訳語をあてた。

「ニューヨーク州立大学」と訳した例としては、シドニー・ティツィオン著、川崎良孝、高島涼子、森耕一共訳『民主主義と図書館』日本図書館協会 1994年 p.104がある。

なおニューヨーク州立大学は、当初、(1)理事會事務局、(2)拡張部局、(3)試験、(4)州立図書館、(5)州立博物館、の5部局で構成されていたが、その後改組をみて、1899年時点では(1)管理運営、(2)カレッジ、(3)ハイスクール、(4)通信教育(home education)*、(5)州立図書館、(6)州立博物館、の6部局構成となっている。

* home education を直訳すると、「家庭教育」となる。しかし、ここでいう home education は、一般に言われるところの家庭教育ではなく、一定の指導にもとづく読書活動およびそれに供するための圖書の貸し出しを意味しているので、「通信教育」と訳出した。(3)小倉親雄は、デューイについて、「近代図書館活動のほとんどあらゆる分野においてその基を切り開いていった、開拓者・創設者・父」と称揚している。小倉親雄『アメリカ図書館思想の研究』日本図書館協会 1977年 p.51。また川崎良孝は、自著のなかで、デューイについて述べ、「図書館界の大指導者」と記している。川崎良孝『アメリカ公共図書館成立思想史』日本図書館協会 1991年 p.15。

(4) Lee, Michael Min-song, op. cit.

(5) Dewey, Melvil, "New York's Part in University Extension" *The Critic*, No.399 (August 23, 1891), p.90.

(6) 当日の講演内容の全文は『*Johns Hopkins University Studies in Historical and Political Sciences*』(Fifth Series XI, November, 1887)に収録されている。しかし同時に、講演内容のうちの第二部に相当する「図書館の活動」は「Springfield Daily Republican」(1887年9月26日)の紙上に、また第3部の「イギリスの大学拡張」は「Ford's News」と『The Annual Report of the Commissioner of Education for 1885-86』に独立論文として掲載されている。

(7) Adams, Herbert B., "Seminary Libraries and University Extension," *Johns Hopkins University Studies in*

Historical and Political Science, Fifth Series XI, November, 1887.

(8)デューイは、1883年、バーナード学長の要請を受けてコロンビア大学図書館長に就職している。学内に分散していた図書館を統合して、大学図書館を一新するにふさわしい人物として、デューイに白羽の矢が立てられた。しかしデューイは、当局の思惑をはるかにこえて、民衆教育に資する図書館司書の養成を思い描いていた。その結果、図書館学部の新設をめぐる、旧勢力との間で激しい軋轢を体験することになった。しかし、大学理事会にしてみれば、図書館学部についてはカリキュラムも入学基準もあやふやでいかがわしいものに映ったし、いわんや女性の入学を許可するなど認めがたい暴挙に思えた。また保守的な大学人からすると、職業教育はアカデミズムを損なう以外の何物でもなかった。さらに現場の連中からは、大学で司書を養成するなどベダテンティックで、実践的でないと、懐疑の眼差しを向けられていた。

デューイが解雇された理由としては、図書館学部の創設、とくに女性の入学についての攻防が指摘される。しかし人事委員会で審議された内容などから推察するに、思いこんだら一途に、しかも強引に事を進めるなど、多分にデューイの性格およびそれにもとづくデューイらしいやり方が周囲の反発を買い、結果的に解雇に影響を及ぼしているように思われる。Lee, Michael Min-Song. Ibid., pp.59, 66.

デューイの気むずかしさはつとに有名で、『図書館を育てた人々 外国編Ⅰ アメリカ』のなかでも、「性格のモザイクとよばれたデューイの多面性をよく理解し、その性格と仕事に対する熱意のゆえにしばしば逆境におちいるデューイを励まし続けた」のは夫人であった、と記している。藤野幸雄編著『図書館を育てた人々 外国編Ⅰ アメリカ』日本図書館協会 1984 p.81.

(9)Dewey, Melvil, "University Extension in New York," *The Proceedings of the First Annual Conference on University Extension*, 1892, p.261.

(10)Ibid., p.270

(11)Dewey, Melvil, "The Extension of the University of the State of New York," *New York State Legislature Senate Documents*, 1890, Vol.1, No.4, p.74.

(12)Dewey, Melvil, "A Problem in University Extension", *The Proceedings of the First Annual Conference on University Extension*, 1892, 1892, p.54.

(13)Ibid., pp.54-5.

(14)Dewey, Melvil, "University Extension in New York," *The Proceedings of the First Annual Conference*

on University Extension, 1892, p.272.

(15)Ibid., pp.271-72.

(16)Dewey; Melvil, "A Problem in University Extension", p.55

(17)大学の主体的な関与という点では、かつてのライシャムの系統に属する実践はもとより、ラーニドらが創始した、図書館を拠点とする初期の実践や、アメリカ大学拡張協会のもとで展開された拡張協会主導型の事業も問題を胚胎していた。

(18)Dewey, Melvil, "The Extension of the University of the State of New York," p.100.

(19)Dewey, Melvil, "University Extension in New York," *The Proceedings of the First Annual Conference on University Extension*, 1892, p.271

(20)Dewey, Melvil, "The Extension of the University of the State of New York," *New York State Legislature Senate Documents*, 1890, Vol.1, No.4, p.105.

(21)Ibid., p.100.

(22)Dewey, Melvil, "University Extension in New York," *The Proceedings of the First Annual Conference on University Extension*, 1892, p.273.

(23)Ibid.

(24)Ibid., p.273.

(25)Dewey, Melvil, "The Extension of the University of the State of New York," *New York State Legislature Senate Documents*, 1890, Vol.1, No.4, p.9.

(26)Ibid., pp.80-81.

(27)この時期の理事会の構成メンバーをみると、大学総長、副総長各1名と、州知事をはじめ職務上理事会委員を務める4名、そして19名の選出委員からなる。これに事務局長のデューイと、補佐が加わる。それらメンバーを出自別に列挙すると次のようである。

Chancellor: George William Curtis,

Vice-Chancellor: Anson J. Upson,

[Ex officio]

David B. Hill (Governor),

Edward F. Jones (Lieutenant-Governor)

Frank Rice (Secretary of State)

Andrew S. Draper (Superintendent of Public Instruction)

[Elected by legislature]

George William Curtis, Francis Kernan, Martin I.

Townsend, Anson J. Upson, William L. Bostwick,

Chauncey M. Depew, Charles E. Fitch, Orris H.

Warren, Whitelaw Reid, William H. Watson,

Henry E. Turner, St Clair McKelway, Hamilton

Harris, Daniel Beach, Willard A. Cobb, Carroll E.

Smith, Pliny T. Sexton, T. Guilford Smith, Rt. Rev. William Crosswell Doane

University Extension Bulletin, No.1, November 1891, p.2.
 (28) Dewey, Melvil, "Extension of the University of the State of New York" *New York State Legislature Senate Documents 1890*, Vol.1, No.4, p.114.

原案が採択される前日の7月9日、デューイは、理事會総会において再び大学拡張の意義とその実施を提案している。*University Extension Bulletin*, No.1, November 1891, p.7.

(29) 1891年時の大学拡張委員会は、以下の7名のメンバーで構成された。

Chairman: Pliny T. Sexton

George William Curtis, Chaune M. Depew,

Charles E. Fitch,

Whitelaw Reid, William H. Watson, St Clair MC

Kelway

University Extension Bulletin, No.1, November 1891, p.2.

(30) *University Extension Bulletin*, No.1, November, 1891, pp.10-11.

(31) Dewey, Melvil, "The Extension of the University of the State of New York," *New York State Legislature Senate Documents, 1890*, Vol.1, No.4, p.81.

(32) デューイは、この1万ドルについて、厳格な運用が必要であることを強調している。その理由として、彼は以下の2点を指摘する。(1) 拡張事業の規模からすると、補助金の額は微小である。州の1学区あたりに換算すると、1ドルに満たない。(2) 大学拡張運動が永続的な成功をおさめるには、保守的で、懐疑的な議員たちが、補助金の必要性と、それが賢明かつ合理的に運用されていることを理解する必要がある。

Dewey, Melvil, "University Extension in New York," *The Proceedings of the First Annual Conference on University Extension, 1892*, p.275.

(33) *Ibid.*, pp.8-9.

(34) Dewey, Melvil, "Extension of the University of the State of New York" *New York State Legislature Senate Documents 1890*, Vol.1, No.4, p.85.

(35) *Ibid.*, p.272.

(36) それでも、デューイは、大学拡張が既存の大学と競争するものではないこと、それどころか、大学拡張によって、受講生たちが正規の大学教育の意義に目覚めたなら、大学にとっては学生の増加につながると、そのメリットを論じている。*University Extension Bulletin*, No.1, November, 1891, pp.13-14.

(37) Dewey, Melvil, "Extension of the University of

the State of New York" *New York State Legislature Senate Documents 1890*, Vol.1, No.4, pp.109-10.

(38) *Extension Department 2nd Annual Report, the University of the State of New York, 1894.*

(39) Russell, James E., "Extension of University Teaching in England and America: A Study in Practical Pedagogics", *Extension Bulletin*, No.10, October 1895, p.221.

(40) Dewey, Melvil, "Extension of the University of the State of New York" *New York State Legislature Senate Documents 1890*, Vol.1, No.4, p.79

(41) 明治時代、佐野友三郎が、デューイに触発され、本邦にもちこんだのは、この巡回文庫の実践であった。佐野友三郎『米国図書館事情』文部省 1918年。

(42) Dewey, Melvil, "New York's Part in University Extension", *The Critic*, No.399, August 22, 1891, p.90.

(43) Dewey, Melvil, "Extension of the University of the State of New York" *New York State Legislature Senate Documents 1890*, Vol.1, No.4, 1890, p.91.

(44) *Ibid.*, p.82.

(45) *Document of the Senate of the State of New York, 1899*, pp.12-14.

(46) ニューヨーク州立大学における1部門として発足した大学拡張部 (the Department of University Extension) であったが、機構改革に伴って、1899年の時点では通信教育部 (the Department of Home Education) と改称されている。このこと自体が、ニューヨーク州立大学における大学拡張の企図および事業を象徴しているように思われる。

デューイが書き記したもの (たとえば『The Director's Report of the New York State Library for 1897』 p. 61など) を読むと、新たな名称を冠した部署は、大学をはじめ、州教育委員会、教会、公共図書館、ピープルズ・インスティテュートなどの機関で行われる教育とは一線を画する、つまりインフォーマルな教育を企図していたことがわかる。

世紀末、すでに「大学拡張」に絶望したアダムスは、大学拡張に代わるものとして自ら提唱する「popular education」や「educational extension」と相通じるものをニューヨーク州の実践に看取していた。

Adams, Herbert B. "Educational Extension in the United States", U.S. Department of the Interior, Bureau of Education, *Report of the Commissioner for the Year 1899-1900*, 1901, p.304.